

授業時 子供の発言を十分に聴く

「大きなかぶ」の音読後、R教諭の「挿絵をよーく見てごらん。何か気付いたことはない？」の質問に自信なげに挙手をしたSさん。

Sさん：「何でも言っているの？」

R教諭：「いいよ。Sさんが気付いたことなら何でも。」

Sさん：「あのね、おじいさんの足の所に血みたいなのが付いてる。」

「えー、違うよ。」と、みんなが騒ぎ出した。

「Sさんは血だと言ってる？よーく聞いてみて。」とS教諭が呼びかけた。Sさんは、「赤くて血みたいなのが…。」と繰り返した。

みんなも挿絵をもう一度見直している。「これは何なんだろ。」と、話が広がった。

突然、Tさんが教科書を持って飛び出してきた。

「おじいさんのひざのつぎと、おばあさんのスカート同じだ。」と次のページの挿絵を指さして言った。

「ほんとだあ！」

「おばあさんの靴は赤みたい。」

「おじいさんのとは違うよ。」

「あわてて来たからだ。」

子どもたちは次から次へと、考えを膨らませていった。

「こんなにみんなでお勉強できたのは、Sさんのおかげだね。」一番大きくうなずいたのはSさんだった。



一問一答式の授業では、子供の考えを深めたり広げたりすることはあまり期待できません。集団学習のよさは、互いの意見を聴き合い、自分の考えを振り返ったり新たな発見をしたりすることにあります。そのためには、まず、教師が十分に子供の意見を聴くことが大切です。

発言は、最後まで熱心に聴く

教師にとって期待した応答でない場合、十分に聴くことなく、「ハイ、他の人？」とすぐに別の子を指名してしまったり、発言途中に「○○ということね。」などとまとめてしまったり、子供によって発問後の待ち時間を変えたりしてしまうことがあります。子供から「答えようと思っていたのに、他の人を当てちゃった。」という不満が聞かれることもあります。

事例における授業の展開は、教師がSさんの発言を切り捨てなかったことが出発点となっています。場合によっては、板書しながら発言を聴くこともあります。基本的には、発言する子供にきちんと向き合って聴き、その発言を子供たちの中でつなげていくことが大切です。

相づちを打つなど受容的な姿勢で聴く

事例では、一つ一つの発言を無視せず大切に扱うことで、子供たちは安心して次々に発言しています。子供の声をそのまま受け入れる中で、「間違えても大丈夫。」という安心感が教室内に満ちているようです。

「うんうん。」「なるほど。」など相づちを打ちながら聴き、「よく考えたね。」など、発言した子が満足感が得られるような言葉がけをしていきたいものです。